

第7回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ミコの大切な大切なものは」

岩手県立福岡高等学校 3年 石澤 咲希



賢治のまちから
高校生★童話大賞

優秀賞へ銀の星賞

岩手県立福岡高等学校 三年 石澤 咲希

『ミコの大切な大切なものは』

「ミコ、しばらく離ればなれになるけど」

お母さんは単身赴任先へと出発する前の日、そう言って白い花が二つくつついたピンどめをくれた。

「これ、あげるから大切にしてね」

あのお母さんの言葉は今もミコの耳に残っている。ミコが小さいころからお母さんは家にいることが少なかった。いつも朝早くに出かけて、夜遅くに帰ってきた。それでも仕事が休みの日はミコと遊ぶ時間を大切にしてくれた。ミコはそのときが一番楽しかった。だから、あまり一緒にいられないことに感じていた寂しさは、お母さんの前では心の奥にしまっておいた。

働き者のお母さんは会社でも頼りにされていて、それで昇進して別の場所で働くことになったそう。単身赴任することになった、とお母さんに知らされたとき、ミコはとても落ち込んだ。長い間会えなくなるというところが寂しくてたまらなかった。でも、そう伝えたお母さんの顔がとても悲しそうだったから、ミコは一生懸命笑顔を作って、もう私四年生だよ。お父さんもいるから大丈夫！ と元気に返事をした。

お母さんがいなくなってから、ミコは毎日のようにもらったピンどめを頭に飾った。それだけで気持ちが安らいだし、それはミコの大切な宝物になった。

そして月日は流れていった。

お母さんは出来るだけ電話をかけてくれた。話しているときは心が弾ん

だ。でも、やっぱりミコの寂しい気持ちは時間とともに積もっていった。お父さんにもお母さんにも黙っていたが、自分はおいていかれたのではないか、捨てられたのではないか、とさえ考えてしまうこともあった。もらったピンどめも宝物であることに変わりはないが、自分の部屋の机の中にしまっておくことが多くなった。

そしてちょうど今、ミコは寝る前に机の整理をしていて見つけたピンどめを眺めていたところだった。

「お母さん・・・」

ミコは小さくつぶやいて、そっとそれをしまった。短くため息をつき、明日のためにもう寝ようとした。

そのときだった。

突然部屋の窓ががらりと音を立てた。ミコはびくりと肩を震わせ、凍り付いた。つばをぐくくと飲み込んでからおそるおそる窓を見ると、誰かが窓の縁に座っているのが見えた。二、三歳くらいの子どものようだった。色黒の肌と、真っ白で無造作に伸ばされた髪の毛や身につけているぼろぼろになったTシャツとズボンが特徴的だった。

ミコはさすっかり混乱して、声を出すことも出来なかった。自然と足が後ずさる。その子どもは部屋の中へずかずかと入ると、ミコの机をごそごそあさり、何かを取り出した。そしてそれをこちらに見せびらからす。ミコははっとする。それは間違いなくお母さんにもらったピンどめだった。

子どもはキッキッキといたずらっぽい笑い声を上げるとあっという間に窓の外に逃げていってしまった。

ミコは何が起こったのかわかなく理解出来ず、しばらくぼかんと口を開けていた。しかし、ピンどめも一緒に持っていかれたのだと気づきあわてて窓の外を見た。外は暗く、もうあの子どもの姿はどこにもない。

大事なピンどめが盗まれてしまった。こんなことになるなら、肌身離さ

ず持っていたればよかった。と泣きそうになった。ミコは服のそでで涙をぬぐうと、急いで今起こったことをお父さんに知らせようと、部屋のドアノブに手をかけた。

「おい、お前」

いきなり知らない声に後ろから話しかけられた。また心臓がばくばくと鳴り出す。さつきの子どもののでは、と思い、ミコはゆっくりと振り返った。すると、やはり窓のそばに誰かが立っていた。しかし、さつきの子どもではない。中学生くらいの背丈の少年だった。青いスーツのような服を着て、それと同じ色の帽子を被っている。まるでお巡りさんのような格好だった。

その少年は真っ直ぐにこちらを見つめ、

「ここに小さな子どもみたいなの、来なかった？」
と尋ねた。

すぐにさつきの子どものことが頭に浮かんだ。ミコはこくこくと首を縦に振る。それを確認した少年は、面倒くさそうな顔になり、遅かったな、とつぶやくと、また出ていこうと窓の縁に足をかけた。

「ちよつと待って・・・！」

ミコはかすれた声でなんとか少年を呼び止めた。少し心が落ち着いてきたようだ。それと同時に今起きていることをきちんと理解したいという気持ちがあわき上がってくる。

「あなた・誰なんですか？」

ミコはおずおずと少年に質問を投げかけた。それでも、知らない人であるということに、少し体を身構える。

「名前きくなら自分から名乗れ、礼儀知らず」

少年は足をおろして顔だけミコに向けると、ぶっきらぼうに言い返した。まるで知り合いであるかのような口調に、ミコはきよんとしてしまふ。それでも、ミコは少しためらって深呼吸をしてから、

「・・・ミコ」

と素直に名乗った。

「スバル」

即座に、少年は言い返した。スバル、とミコも心の中でつぶやいてから確認する。

「えっと、スバル君・・・？」

「スバルくんじゃなくてスバル。聞こえたら。わざと間違えてるわけ？」

ミコはその返答にさらに拍子抜けし、緊張の糸もふっとんでしまった。自然と長いため息がもれ、顔がゆるむ。スバルはそんな様子を見て、まあいいけど、とつぶやき、軽くため息をついた。

「俺、急いでるんだけど。もういい？ あれを早く捕まえなきゃならないし」「捕まえる・・・って、さっきの子を？」

「子じゃない。鬼小人」

オニ？ コビト？ 物語の中にはよく登場する生き物の名前にミコはぼかんと口を開けてしまった。さっきの子どもはどう見ても人間だったはずだ。

「人間が妖怪とか妖精とか呼んでいるだろ。あいつらは人間が大切にしている物を盗む」

ミコはまだ頭の整理が出来なかったが、ぱっとあのピンどめのことを思い出した。

「あの・・・私、その鬼小人にピンどめ盗られちゃったの！」

ピンどめのこととなるとつい口調がきつくなってしまった。

それを聞いたスバルは、また面倒くさそうな顔をしたが、

「そうか。じゃあ、俺が取り戻してくる」

と、またぶっきらぼうに言い放った。しかし、その言葉はやけに頼もしく、それこそ服装通りの警察官のようだった。ミコがそう思ったことをスバル

に伝えたとき、スバルの表情が激変した。

「人間と一緒にするな」

どなったわけではなかった。しかし、その氷の様な表情と言葉はミコに突き刺さった。そしてそれは、スバルが鬼小人と同じように人間ではないこと、さらにスバルが人間を嫌っているということをミコに理解させるには十分だった。

ミコは自分は嫌われてしまったのだと落ち込み、うつむいたままごめんなさい、と小さく謝った。気づかれないようにスバルの表情をうかがうと、さっきまでのぶつきらぼうで面倒くさそうな表情に戻っていた。

「そういうわけだから、俺は鬼小人を捕まえに行く」

「・・・待って！・・・私も捕まえる」

ミコは反射的にスバルにそう言ってしまった。お母さんにもらったピンどめのことが心配で、すぐにでも取り戻したいという気持ちが強かったし、さっきのスバルの言葉が気になったからだ。このままスバルとぎすぎすした雰囲気で別れるのも嫌だった。

「ダメ。・・・って言うてもついてくるだろお前。別にいいけどじゃまするな」
ミコから目を離しながらスバルはそう告げた。スバルなりにさっきのことをすまないと謝っているようで、ミコは少し気が楽になった。

「ありがとう・・・頑張るから」

お父さんに気づかれないうちにも、ミコも部屋の窓から外に出ることになった。裸足のまま外に探しに行くことをやっぱりためらってしまったが、スバルが面倒くさそうに手をさしのべてくれたため、ミコは照れて頬を染めながらもその手をとって夜の空の下へ飛び出した。

スバルは地面をじっと見つめながら早歩きでずんずんと進んでいった。むき出しの足からアスファルトの冷たさが伝わってくる。ミコにとって、

こんな夜中に外を歩くのは初めてで恐怖感がわいてきたが、スバルはスピードを落としてくれないので、見失わないように頑張つてついでいった。スバルは、鬼小人がつけた足跡が見えるのだ、と言っていた。ミコも目をこらして地面を見たが、全く分からない。

どのくらい歩いただろう。スバルが突然小さな空き地の前で止まった。スバルが物陰に隠れるように手で指示を出す。瞬時にミコは鬼小人が見つかったのだと理解した。物音を立てないようにしてそっと空き地をのぞくと、まだらに伸びた草原に何かが座っているのが見えた。

小さな体、色黒の肌と、真っ白な髪の毛、その見覚えのある姿は確かにミコが部屋で見たあの子どもだった。ミコから盗んだ白い花のミコのピンどめをさがして、じろじろと眺めている。

ミコの心臓がどんどん高鳴っていった。無意識のうちに体が前に乗り出す。すかさずスバルが腕でミコを押し止めた。

「ここにいろ。捕まえてくる」

「・・・私も・・・手伝いたい！」

大切なピンどめが目の前にあるのに、じっとしているということが出来なかったのだ。

「・・・はいはい。じゃあ俺がお前のとこまであれを追い込む。しっかり捕まえろよ」

淡々と了解してくれたスバルにミコは大きく首を縦に振る。

スバルは深呼吸をすると、勢いよく飛び出した。鬼小人めがけて飛ぶように走っていく。

鬼小人は突然の出来事に慌てふためき、キーキーと叫びながらどうにかスバルから逃げようとしている。スバルはスピードを落とすことなく確実に鬼小人を追いつめていった。その鮮やかな動きにミコは見とれてしまう。そしてついに追い込まれた鬼小人がミコをめがけて突進してきた。はっ

として身構える。だが、鬼小人の足は思ったよりも速く、捕まえようとした瞬間鬼小人と激突してしまった。

ミコは衝撃と痛みを目をつむってしまふ。そのときだった。

ミコの頭の中に次々と様々な映像が映し出されたのだ。ミコは驚いてしりもちをついたまま固まってしまった。

「捕まえるんじゃないの？」

はっとして、ミコは我に返った。スバルがあきれたようにミコを見下ろしている。その手はがっしりと鬼小人の服をつかんでいた。キーキーと鬼小人が甲高い声を上げて暴れている。スバルはそれに全く動じることなく、騒ぎ立てる鬼小人をにらみつけた。それを見た鬼小人はびくりと体を震わせたが、同じようににらみかえすと、ぶすくれた顔をしてその場にどっかりとあぐらをかいて座り込んだ。

「あとはお前がどうにかしろ。こいつはなかなか盗んだものを返そうとしな
いからな」

と、スバルが面倒くさそうに言う。なるほど、鬼小人はミコのピンどめをしつかりと握りしめ、全く離そうとしない。

「あの…私のピンどめ返してくれる…?」

ミコが頼み込むように尋ねると、鬼小人はキーキーと嫌みったらしく声を上げ、握ったピンどめを乱暴に背中に隠した。それは本当に幼い子ども
のようで、ついため息がもれてしまう。視線でスバルに助けを求めたが、
さすがのスバルも肩をすくめてみせた。

どうしようもなくなったミコは、その場をとりつくるようにさつき自分
に起こった不思議な出来事をスバルに伝えようと言葉を探した。

「あの、さつき、鬼小人とぶつかったとき…変な映像みたいなのが頭に浮
かんできたの」

それを聞いたスバルは少し驚いて、何かを考えるようなしぐさをした後、

「それ・・ゴミとか捨てられた物とか出てこなかった？」

と、ミコが見たものをぴたりと当てた。そう、確かに思い出してみれば、鬼小人とぶつかった瞬間、捨てられたおもちゃや機械、山積みにされたゴミの映像がミコの頭をよぎっていったのだ。

「これ・・なんだか分かる？」

ミコは質問せずにはいられず、スバルの顔をうかがった。スバルは、なかなか口を開こうとしない。うつむいて話すのをためらっているようだった。

ミコは気になったが、話したくないのかもしれないと思って、話したくないならそれでもいい、とあわてて伝えようとした。そのとき、スバルは長くため息をついてゆっくりと口を開いた。

「こいつだってその辺からわいて出てくるわけじゃない」

そう言いながら軽く鬼小人に目をやる。

「こいつは・・物に宿った心が集まって生まれるんだ」

「・・物に宿った心・・？」

「しかも、人に捨てられた多くの物の思いだ。悲しさとか、つらさとか、恨みもあるかも。それから生まれるらしい」

ミコは黙ってスバルの話に耳を傾けた。

「こいつが大切な物を盗むのにも理由がある。自分は大事にされなかった。だから、大事にされてる物がうらやましいし、ねたましい、それに寂しいし。だから、盗む」

「そうだったんだ・・」

ミコはそれしか返事を返せず、相変わらずぶすくれた顔で座っている鬼小人を見つめた。うらやましいとか寂しいという気持ちはミコにも痛いほど分かった。またお母さんのことが頭に浮かぶ。

「私もその気持ち、わかるよ。そのピンどめはお母さんが仕事で家からいな

くなる前にもらったの。お母さんがいなくなってからずっと寂しかった。授業参観とかにお母さんが来てくれる友達を見て、うらやましかった。もしかしてお母さんに捨てられたんじゃないかって思ったこともあったの」

ミコの気持ち言葉となって外にあふれ出す。無意識に自分と鬼小人を重ねてしまったのかもしれない。

「かわいいそうだね…。鬼小人も」

ミコは素直に思ったことをスバルに伝えた。

しかしその言葉を聞いたとたん、スバルの表情が突然変わり、氷のような瞳がミコを見すえた。

「かわいいそうか…。だから人間は嫌いなんだ」

思いもしなかったスバルの低く冷たい声に、ミコはたじろぎ、ただスバルの顔を見つめる。

「お前だって物をすててきただろ。簡単に」

「…それは…」

「捨てられる物だけじゃない。そういうものに出会ったときだけ、かわいいそうだと哀れんで、その後は何くわぬ顔でひどいことをやってのけるだろ人間は。都合のいいときだけいい人ぶるな」

ミコは何も言えなくなってしまった。スバルの言うとおりであった。だってたくさんの物を捨ててきたことは事実だった。テレビで多くの捨てられる物を見て、かわいいそうだと思った。でも、その次の日は平気な顔で使わなくなった物を捨てていた。それも間違いない。ミコは、結局自分のことしか考えていなかったのだということを知らされた。スバルの顔をまっすぐに見られなくなっとうつむいた。スバルもそれから黙り込んだ。鬼小人でさえ目を丸くして、身動き一つしようとしなない。

ミコは涙が出てきそうになった。つらさや悲しさや恥ずかしさが入り交じった物が心を埋め尽くしていくのが分かった。震える唇を一生懸命かみ

しめて、泣くのをこらえた。こんなことを言われるならば、スバルについてこなければ良かったとさえ思えてきて、家がとても恋しくなった。

木の葉がカサカサ風に揺れる音がやけに大きく聞こえた。ミコはおそろおそろスバルのほうを横目で見てみた。スバルの顔からはさっきの冷たさは消えていて、まゆをしかめてうつむいている。

ミコは一言スバルに謝るべきなのだと思った。しかし、なかなか言葉が前に出てこない。涙も止まらず頬を伝っていった。

気まずい雰囲気はミコとスバル、そして鬼小人の間をどんよりと漂っていた。

「俺は・・・どうやって生まれたか・・・お前分かる？」

先に口を開いたのはスバルだった。

「え・・・分からないよ」

ミコは少しどもり、ためらいながらぼそぼそと返事を返す。

「俺は人の心から生まれた。人間の中途半端な正義感、偽善、崩れていった夢、そんなのが集まって生まれたんだ」

そこでスバルは一息つき、空を仰ぐように言った。

「人間は嫌いだ。でも恨んでない。人間がいないと俺はいないんだし。気づいたら人間のために働いてたし。・・・鬼小人がどうやって生まれたかを知ったとき、俺も気の毒に思った。けど、だからって人間の大切な物を盗むことは許されない。半端な正義は持ちたくなかったし。だから俺は鬼小人を捕まえるのを絶対やめない」

その目に迷いは全くなかった。スバルの横顔がずっと大人びて見えた。

ミコは涙を袖でぬぐい、立ち上がってスバルの目の前まで歩いて行って、

「ごめんね・・・スバル」

と、謝った。心にたまったどんよりしたもやが少しずつ消えていく。

「別にいいけど」

スバルがぶつきらぼうに言い返す。その言葉と表情にはほんの少しだけ優しさが含まれているようで、ミコの顔から自然と笑みがこぼれた。

そして、ミコは長く息を吐き出すと、鬼小人に向き直り同じ目線までしゃがみ込んで、その瞳をしっかりと見つめた。

鬼小人はミコをにらみつけ、身構えるようなしぐさをする。

「あなたの気持ちが分かるって言ったのは本当だよ。でも、そのせいにして自分はいかかわいそうなんだって思いこんだり、誰かのものを奪ったりしちゃいけないんだ。…ごめんなさい。私やっぱ都合のいいこと言ってるよね」
ミコの口から次々と言葉がつむがれていく。

「あなたが生まれたのは私のせいかもしれない。だから…もつとこれからいろいろなものにちゃんと気を配って、あなたみたいに誰かがもうつらい思いをすることがないように…努力したいって思ったの」

言いたいことは全部伝えた。

スバルは黙ってその様子を見守っていた。鬼小人も視線をそらさなかった。鬼小人はミコの全ての言葉を聞き取った後、小さくなってうつむきながら、ピンどめを握った手をゆっくりとミコに差し出した。ミコは、ありがとう、と優しく微笑みかけ、そのピンどめを大事そうに受け取る。

鬼小人は手を乱暴に引っ込めると、かすかにいたずらっぽい表情を浮かべ、だんだん透けてとうとう見えなくなってしまった。

ミコは何が起きたのか分からなくて、辺りを見回して鬼小人を探した。「心が物に戻った。…少しは嬉しかったのかも。でもお前、言うのは簡単だからな」

スバルがまたぶつきらぼうに言う。しかし、その言葉に嫌味は少しも感じられなかった。むしろ清々しかった。

「うん、わかってる」

ミコは静かにつぶやきながら、受け取ったピンどめを見つめた。そのとき、

またさつきのように頭に映像が流れたのだ。ミコが見たのは、ミコと楽しそうに遊ぶお母さんの姿だった。優しそうな笑顔を浮かべている。

「・・・大事なこと、忘れてたよ。お母さん、いつも私のこと大切にしてくれていたのに・・・私、捨てられたなんて・・・」

また涙があふれてきそうになる。ミコはピンどめをぎゅっと抱きしめた。

「・・・まあ、一件落着か」

スバルはすたすたと来た道を戻り始めた。ミコもあわてて後を追う。

「スバルも・・・ありがとう」

歩きながら、ミコは精一杯の感謝の気持ちとほんの少しの照れくささを込めてスバルにお礼をいった。

「別に・・・。俺も・・・ありがとう、ミコ」

木の葉の音にかき消されてしまうような小さな言葉だったが、ミコの耳にはしっかりと届いた。

早く帰らないとお前まずいだろ、と言いつつと、スバルは走り始める。

ミコもうん、と元気に返事をしてそれについていった。

暗い夜道ももう怖くも何ともなかった。